

米沢図書館蔵倭玉篇の字音の拗音表記

梅崎, 光
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/9413>

出版情報 : 語文研究. 82, pp.49-57, 1996-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

米沢図書館蔵倭玉篇の字音の拗音表記

梅 崎 光

米沢図書館蔵の倭玉篇^(註)に付された字音注記のうち拗音表記の特徴的な点について報告する。

本稿で問題とする米沢図書館蔵本について、辞書史のうえから川瀬一馬氏はつぎのように記述している。

米沢図書館蔵の一本は室町末期の写本で、もと直江山城守兼統の旧蔵にかゝる。上下二巻(一冊)、上巻は目録一葉・本文墨附五十一葉。下巻(衣部より)は目録二葉・本文墨附四十四葉。上巻の篇目五十九、下巻同二百四十六、合せて三百五部。每半葉八行八段書写。二巻に分つ点は他の凡ての伝本と異なる点であつて、各巻別に部首を通算してゐるのは、前記判紙本の一本と相似の関係にあるが、その部首配列の順が中間の部分に於いてすべての第四類本と異なるのは或は本書のみの任意の改変であらう。第三肉部はなく、心部は分立してゐる。〔増訂 古辞書の研究〕雄松堂、一九八六年二月 720頁)

ここにいう第4類本とは、川瀬氏が倭玉篇諸本を8類に分類したもののひとつで、「最も多く伝写されてゐて、室町時代に於ける倭玉篇の流布本と見るのが適当」(682頁)とのことである。

本書の来歴をしるてがかりとしては、上巻目録(1丁オ)に存する「米沢蔵書」の印がある。川瀬一馬氏が「直江山城守兼統の旧蔵にかゝる」と述べたのは、この印記によるのであろうか。ただ、この「米沢蔵書」印をもって直ちに直江兼統の旧蔵書と断ずることは疑問を呈するむきもある。森鹿三氏「米沢藩学とその圖書の歴史」(内田智雄氏編『米沢善本の研究と解題』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会刊、一九五八年八月) 19〜20頁に、

私はむしろこの印を以て兼統の蔵書印とは認めがたく、結局は、元禄十二年の矢尾板檢書前に米沢の藩庫に収儲された書籍に捺された官用の蔵書印とするのが、より妥当的ではなからうかと思つてゐる。

とあるごとくである。だがいづれにせよ、同書にも引用された『官庫御書籍目録』(巻末に「右者元禄十二年六月中矢尾板三印江被仰付改正之御書籍目録帳一冊御右筆所在之御帳ヲ以寶曆七年六月中虫乾之節御右筆所為手扣書寫之者也」とあるとのこと)の「三番乾五日十箇」には「和玉篇(一)」とあつて(同書15頁)、元禄12年当時すでに米沢藩の書庫におさまっていたのであるから、本書の成立

@梅 (103・88・シユク) 『玉篇略』 094・16・シヨク
 @辱 (119・35・ジユク)
 @蠹 (161・53・シユク) 『玉篇略』 165・53・シヨク

◆ シユ(ジユ)とあるべきものがシヨ(ジヨ)と表記されているもの—53例

@喘 (003・11・シヨ) 『伝紹益筆本』 003・37・トウ・シユ)
 @銖 (031・26・シヨ) 『玉篇略』 031・68・シユ)
 @澁 (037・72・シヨ) 澀『玉篇略』 038・16・シウ)
 @手 (051・11・シヨ) 『伝紹益筆本』 063・21・シユ)
 @鳩 (062・66・シヨ) 『玉篇略』 061・64・シユ)
 @陬 (085・76・シヨ) 『玉篇略』 078・32・シユウ)
 @守 (091・31・シヨ) 『玉篇略』 081・53・シユ)
 @修 (093・84・シヨ) 『玉篇略』 084・38・シユ)
 @脩 (093・85・シヨ) 『玉篇略』 084・41・シユ)
 @頌 (095・26・シヨ) 『伝紹益筆本』 123・77・セウ・シユ)
 @須 (095・44・シヨ) 『玉篇略』 086・47・シユ)
 @孺 (099・52・シヨ) 『玉篇略』 090・45・シユ)
 @酒 (105・37・シヨ) 『玉篇略』 095・64・シユ)
 @醜 (105・84・シヨ) 『玉篇略』 096・31・シユ)
 @首 (115・71・シヨ) 『玉篇略』 106・81・シユ)
 @茱 (134・12・シヨ) 『玉篇略』 126・45・シ)
 @數 (138・61・シヨ) 『玉篇略』 135・13・シウ)

@趣 (140・64・シヨ) 『玉篇略』 138・34・シユ)
 @暨 (146・33・シヨ)
 @爰 (148・21・シヨ) 『玉篇略』 149・21・シユ)
 @受 (152・71・ジヨ) 『玉篇略』 154・24・シユウ)
 @鞋 (158・73・シヨ) 『玉篇略』 161・78・シユ)
 @糲 (166・21・ジヨ) 『玉篇略』 171・16・シユ)
 @須 (175・41・シヨ) 『玉篇略』 182・31・シユ)
 @嚴 (180・54・シヨ) 『玉篇略』 188・84・シウ)
 @璽 (185・45・シヨ) 『玉篇略』 194・83・シユ)
 @需 (187・24・ジヨ) 『玉篇略』 197・54・シユ)
 @爰 (目錄卷下1・83・シヨ)
 @宿 (091・17・シヨク)
 @縮 (126・62・シヨク) 『玉篇略』 119・18・シユク)
 @宿 (133・21・シヨク) 『玉篇略』 123・31・シユク)
 @困 (141・45・シヨク) 『玉篇略』 139・84・シユク)
 @岫 (175・63・シヨク) 『玉篇略』 182・64・シユク)
 @岫 (177・34・シヨツ) 『玉篇略』 184・72・シユツ)
 @旬 (001・48・ジヨン)
 @掇 (052・64・シヨン) 『伝紹益筆本』 065・27・シユン)
 @拘 (056・26・シヨン) 拘『玉篇略』 056・67・シユン)
 @踳 (059・63・シヨン) 『玉篇略』 060・73・シユン)
 @跋 (059・83・シヨン) 『玉篇略』 060・55・シユン)
 @徇 (093・46・シヨン) 『玉篇略』 083・82・シユン)

- @醇 (105・74・シヨシ) 『玉篇略』 096・18・シユシ
 @笋 (122・82・シヨシ) 『玉篇略』 115・22・シユシ
 @筴 (123・42・シヨシ) 『玉篇略』 115・57・シユシ
 @純 (128・13・シヨシ)
 @殉 (140・35・ジヨシ) 『玉篇略』 137・65・シユシ
 @岫 (147・22・シヨシ) 『玉篇略』 147・85・シユシ
 @准 (151・22・ジヨシ) 『玉篇略』 152・44・シユシ
 @舜 (152・64・シヨシ) 『玉篇略』 152・34・シユシ
 @雜 (153・12・シヨシ) 『玉篇略』 154・63・シユシ
 @隼 (153・26・シヨシ) 『玉篇略』 154・76・シユシ
 @旬 (160・62・シヨシ) 『玉篇略』 164・46・シユシ
 @隼 (162・15・ジヨシ) 『玉篇略』 154・76・シユシ
 @樽 (175・66・シヨシ) 『玉篇略』 182・74・シユシ

これらは表記面からだけみると、「ユ」「ヨ」の文字がいれかわつたものにすぎない。だがこうした交替表記がみられるのは、シユとシヨとに独特なもののようなのである。すなわち、「キヨ」「チヨ」「ニヨ」「リヨ」が「キユ」「チュ」「ニユ」「リュ」と表記されるような例はみあたらないのである。

これと同様な表記が見られる文献をほかにもとめてみると、まず『天正狂言本』があげられる。所在を『狂言古本二種』(わんや書店一九六四年七月)によってしめすと、つぎのような例がある。

シヨ↓シユ

鷹しゆ《雁書》(5上17)／しゆまふ《所望》(5下18)／しゆまふ《所望》(5下19)／しゆりやうもち《所領持》(28上18)／し

ユ国《諸国》(17下1)／しゆ国《諸国》(17下4)

シユ↓シヨ

しよく《宿》(10上21)／しよ行《修行》(20上2)／ちしよ《地主》(14下19)／どくしよ《読誦》(13下23)／しよみやうちやうをつ《寿命長遠》(17上15)／しよんきやく《順逆》(25上8)／しよんの舞《順の舞》(25下6)

ただし、『天正狂言本』には以上のような例のほかにも、ウ列音とオ列音との交替表記という点では共通な、つぎのような例もある。
注2。

せう《主》／せうく《秀句》／せうと《舅》／ちう《長》／ひう
 《豹》／ふゆふ《芙蓉》／みうたん《妙丹》／きふけ《教化》／ち
 んちう《尋常》／こきふ《兒校》／みうおつかう《妙音講》／はく
 ゆふ《伯養》／一ひう《一儀》／ざうゆう《雜用》／ちうほく《調
 伏》／きふろん《経論》／しやうぎふ《聖教》

右記のように、『天正狂言本』におけるウ列拗長音とオ列拗長音とのあいだには、各行にわたって交替表記がみられるのである。(ただし、ウ列↓オ列はサ行にかぎられる。)

さて、こうしたウ列拗長音とオ列拗長音の交替表記例は、米沢本倭玉篇においてはそうおおくは出現しない。みつけたかぎりのものは以下の例である。

◆ カ行

@類 (094・43・キウ) 《伝紹益筆本》 122・73・ケウ

◆ サ(ザ)行

@抄 (023・15・シウ) 『玉篇略』 022・67・ヘウ。米沢本の音注は「抄」と誤認したものか)

@招 (052・54・シウ) 『伝紹益筆本』065・21・シヨウ。

単に書写の過程で「ヨ」が脱落したものであるという可能性もある。

@抄 (056・33・シウ) 『053・17』には「セウ」とあり

@袖 (103・12・セウ)

@舛 (139・73・セウ) 〔州〕の別体としての音注

@秀 (163・71・セウ)

@十 (162・11・ゼウ)

◆タ(夕)行

@轍 (096・42・チウ)

@颯 (101・81・チウ)

@剛 (139・22・チウ) 『玉篇略』136・48・テウ)

@儻 (010・31・テウ)

@忠 (065・51・テウ)

@綱 (126・51・テウ)

@稠 (144・13・テウ)

@雕 (153・25・テウ)

◆ヤ行

@燿 (025・58・ユウ) 『玉篇略』026・18・ヨウ)

@鶴 (062・45・ユウ) 『玉篇略』061・45・エウ)

@遥 (082・84・ユウ) 『玉篇略』076・37・ヨウ)

@孕 (099・23・ユウ) 『玉篇要略集』085・15・ヨウ)

@玄 (183・11・ユウ) 『玉篇略』192・21・エウ)

@幼 (183・26・ユウ) 『玉篇略』192・23・ヨウ)

@誘 (013・55・ヨウ) 『伝紹益筆本』017・23・ユウ)

@袖 (021・73・エウ) 『玉篇略』022・28・ユウ)

◆ラ行

@榜 (023・14・リウ) 『伝紹益筆本』027・47・レウ)

なお、以下の3例には「エウ」という音注が付してある。複製ではっきりと確認するのは困難であるが、これらはもと「エウ」とあったものを別筆で「エウ」と訂してあるようにもみえる。また、語頭のエを表記するカナとして本書ではもっぱら「エ」を使用しているという点から、この「エウ」という表記は異例なのである。よって、後人による音注という可能性があるので、ここにはふくめないことにする。游(035・24) / 颯(045・87) / 喇(088・78)

さて、これらの例においてウ列表記となっている漢字の音は、本来は合音であるものばかりである。また逆に、もともとウ列であるものがオ列表記になるとき、それはかならず合音のかたちとなっている。このようなウ列拗長音とオ列表記(のうちの合音)との交替表記については、それが中世末期から近世初期のさまざまな文献にみられることが指摘され、なぜそのような表記がでてくるのかという問題が議論されてきた。そうしたなかで迫野虔徳氏「オ・ウ段拗長音表記の動揺」(『国語国文』44-3、一九七五年三月)が、これをオ列表記の開合の区別にかかわる問題として論じている。

この論文で迫野氏はつぎのような解釈を提示された。すなわち、オ列長音の開音が合音に接近することで開合の区別を解消しつつあった時期に、この区別を保持するべく合音がウ列長音(拗長音に限定されない)に音価を近似させた結果、こうした表記例が出現するにいたったのである(同論文39頁以下をもとに要約)。

本稿の筆者も、この問題に関しては、この解釈にしたがうべきものとかんがえている。とすると、米沢本倭玉篇にウ列拗長音とオ列合音との交替表記がみられることは、この文献が室町時代末期から江戸時代初期の成立であることからみて、そうめずらしいことでもないということになる。

だが、最初にあげたシュ→ショ交替表記に対しては、こうした開合の区別とは別の事情がからんでいるようである。

実は、おなじ米沢図書館に蔵せられている『沙石集』の写本に、倭玉篇とおなじ傾向があることが報告されている。片岡了氏「米沢市立図書館蔵『沙石集』の拗音表記」(『大谷学報』55-3、一九七五年二月)によると、「白居易」の1例をのぞいて、長音でないウ列拗音とオ列拗音との交替表記例が存するのは頭子音がサ行・ザ行のものにかぎられ、ことなり数で22個の交替表記例がみられるという。^(注4) そうした例のみられる理由として片岡氏は

結局 [si:] と [si:] (又は [o:] と [u:]) の韻尾の母音 [i]・[u] に問題が行きつくことになる。その母音が先の拗長音でもそうだったように、明確なきこえをもった [o]・[u] でなく、表記上両様の形を許すような中間の音だったのであろう。ただこの場合、先にも記したように、その相通が、サ行・ザ行に偏しているところからすると、シ・ジの子音 [i]・[u] につられて、後統の母音が口蓋化せられて区別がつきにくくなっていったものと解される。(63頁以下)

という事情を推定した。そのうえで、「この他にオ列長音及びオ列開拗長音の表記に關しても検討を要する。それら全体が方言との結びつきをもつかどうかという点も考える必要がある。」(64頁)と、

かかる事象と方言との関係を示唆された。

そういえば、さきに本書と共通する表記例のみられる文献としてあげた『天正狂言本』は東国方言を反映するものとされている。^(注5) また、そうした過去の東国方言の様相をつたえたとされる天正本以外の文献についての報告も、これまでいろいろなものがでていいる。^(注6) 結局、本書にみられる交替表記もそうした方言的要素の露出したもののひとつだともわれるのである。

実際、現代の東国方言をながめてみると、ウ列拗音とオ列拗音の合流のみられる方言が山形県・新潟県・長野県あたりに分布しているし、そうした傾向は、さかのぼって江戸時代の文献においても記録されている。たとえば、氏家剛太夫『庄内方言歌』には「○方言ユヨの音に別なく、皆ヨと唱ふ。露をツヨ、雪をヨキ、春風をショフウ、冬風をフヨカゼと言ふの類なり。【中略】是より及ぼして、チウ ジウ キウ等いふ音をテウ ゼウ ケウなど呼ぶなり。例へば忠臣龍臣に別なく、一重一丈を混じ、灸治経師の分ち無きが如し」(『三天重松氏「庄内語及語釈」刀江書院、一九三〇年七月、67頁)とある。現代とおなじく一九世紀初頭の庄内方言においてもウ列拗音とオ列拗音との合流はサ・ザ行にかぎらず、各行にみられるわけである。

天明七年の万象亭作『田舎芝居』にみえる「せうよたる(醬油樽。313頁下・321頁下・322頁下)」「わかいしよ(若い衆。317頁上)」「よろして(許して。324頁下)」「百合(よりの花(323頁上))」というかたちも、中央語のユ(およびウ列拗音)に相当する部分をヨ(およびオ列拗音)と発音する特徴を、越後方言らしさを表現する手段として利用したものである(引用は『洒落本大成』第13巻、中央公論社、

一九八一年七月)。なお、東條操氏「洒落本に現れたる方言の考察」(『方言と方言学』春陽堂、一九三八年六月) 313頁を参照のこと。

また、迫野虔徳氏「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」(『語文研究』22、一九六六年一〇月。引用は柴田武氏・加藤正信氏・徳川宗賢氏編『日本の言語学第6巻 方言』大修館書店、一九七八年一〇月、による)によると、こうした傾向がすでに中世において生じていたらしいことがわかる。そこにあげられた「ウ、オ段開拗音」の例も、長音でないのは「成就(しやうじゆ)・御りうしゆ(料所)・よう(ふ)しゆ(用所)・しゆやく(諸役)・扶助(ふじゆ)・しゆ(緒)・ししゆ(所) (593頁以下) のようにサ(ザ) 行のもののみであって、米沢本沙石集や倭玉篇と表記上の傾向において類似するものがある。米沢本倭玉篇にみられる交替表記例も、このような方言のもちぬしによって音注が付された結果なのであろう。

では字音以外にも、東国方言の影響をおもわせる事象はないであろうか。まず、いま問題にしているのと同様の表記が「冬(フヨ) 079・36、151・18」「謎(ユウ) 106・14」という和訓の表記にもみつかると。残念ながらいまのところこれ以外の例がないのであるが、やはりユ↑ヨの例とみられる。とすると、「ウ列拗音とオ列拗音の交替表記のみられるのはサ(ザ) 行だけ」という、さきほどの傾向に対する例外となるわけである。また、米沢本沙石集にも1例ながらキョ↓キユの表記例があった。そうした事実を重視すれば、かかる表記が出現する条件として片岡氏がのべられた「シ・ジの子音」〔3〕につられて「云々のような推定には問題があるのではないだろうか。

また、音声とかかわりそうなものとしては、ヒトシの混同とみら

れる例が「否(088・42・シ) 脂(005・65・ヒ)」の2例ある。

さらに「瘡(カエカリ) 109・45」「疥(カエカリ) 109・18」「痒(カエカリ) 109・12」といった例も、カユ↓カイという変化をへたうえで、さらにイとエとの混同の結果その連母音の後半が「エ」と表記されたものであるかもしれない。

勿論これはエ↓エという単なる誤写の可能性もある。実際、本書でエと表記されたものなかには、「鶺鴒(062・53・エツ)」のような、誤写とおぼしき例(鶺鴒の音はコツ。ちなみに050・77には、おなじ鶺鴒に対して「コウ」と注する)がある。また、「咽(087・31・ユツ)」「室(091・73・ユン)」「爰(152・63・ユン)」「雕(153・25・ユル)」のような、エ↓ユの誤写とおもわれる例があるので、その逆の誤写例があってもおかしくない。しかし、「癩(109・31・カヘカリ)」という例もあることであり、ここは単なる誤写とみるよりも、やはり「カユガリ」とは区別された「カエガリ」という語形を表記したものであるとおきたい。

一方、表記以外の面では、あまり東国方言的な要素を指摘することがむずかしい。しいてあげれば、動詞活用的一段化の例が散見されることであろうか。以下、例をあげる。

膏(004・87・コエル)／膩(005・66・肥↑コエル)／腫(006・53・コエル)／植(019・18・ウエル)／杜(022・82・ヒエル)／瓢(048・68・ウセル)／捻(057・37・ヒツサケル)／蹴(058・18・コエル)／踐(058・44・ヲエル)／跨(058・54・コエル)／艱(080・

21・タシナメル) / 飢 (080・88・ウエル) / 通 (082・27・ツラネル) / 寝 (091・33・イネル) / 安 (091・42・イネル) / 醜 (105・83・シハ・エル) / 瘦 (109・32・ヤセル) / 疝 (109・34・タエル) / 痊 (109・85・イエル) / 瘰 (110・36・イエル) / 弩 (115・22・カケル) / 耐 (119・36・タエル) / 對 (134・86・ヲヘル) / 劇 (139・13・タヘル) / 剩 (139・34・タエル) / 創 (139・55・タヘル) / 殖 (140・45・ウエル) / 越 (140・73・コエル) / 超 (140・74・コエル) / 持 (144・86・ウエル) / 勝 (156・82・タエル) / 勳 (157・24・タエル) / 黜 (160・75・タエル) / 斃 (161・64・フセル)

語彙の面では東国的なものを発見することはできないが、本書の辞書としての性質上、方言的な要素が混入することはむしろかしいのであろう。

以上、米沢本倭玉篇の字音表記の特徴的な点として、「ウ列拗音」とオ列拗音との交替表記がサ(ザ)行に集中してみられる」ということを指摘し、そうした表記が、米沢本の編者自身の方言の影響によるものであろうと推定した。このことは、従来あまり明確に指摘されることになかったようであるが、本書の成立事情をかんがえる際には重要な点だともわれる。また、過去の東国方言の様相をかいまみせてくれる文献であるという点からも、さきの沙石集と同様、米沢本倭玉篇は貴重な資料だといえる。

注

(注1) 米沢本倭玉篇の本文、および用例の所在表示の方法は北森昭氏編『倭玉篇五本和訓集成』本文篇・索引篇(汲古書院、一九九四年三月)く九五一年一月による。

(注2) こうしたのもふくめた天正本の表記の特徴については蔵野嗣久氏がつぎの2編の論文にまとめている。「国語資料としての天正狂言本について―音韻表記の特徴を中心として―」(『国語国文論集』(安田女子大学)3、一九七二年六月)、「国語資料としての天正狂言本について 続・音韻表記の特徴」(『国語国文論集』(安田女子大学)4、一九七三年六月)

(注3) 山田忠雄氏「法明童子」(山田孝雄追憶史学・語学論集)宝文館、一九六二年一月)・吉川泰雄氏「近古国語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」の相関」(『近代語誌』角川書店、一九七七年三月)等参照。

(注4) 長音のばあいには、各行にわたって交替表記がでてる。
 (注5) 迫野虔徳氏「東国文献と言語指標―「天正狂言本」における「借り」をめぐって―」(北九州大学文学部紀要)7、一九七二年二月)参照。

(注6) たとえば、洞門抄物や「元龜二年本運歩色葉集」『梅津政景日記』など。近年も小林芳規氏が角筆文献で庄内方言の反映したものを報告している。金田弘氏「洞門抄物と国語研究」(桜楓社、一九七二年一月)、迫野虔徳氏「元龜二年本運歩色葉集」について」(『国語国文』42・17、一九七三年七月)、同氏「梅津正景日記」―江戸時代初期東国語文献―」(『文学研究』79、一九八二年三月)、小林芳規氏「近世の角筆文献研究の課題―(坤)庄内方言の角筆文献の解明と方言史の開拓―」(『文学・語学』152、一九九六年一月)等参照。

(注7) 川本栄一郎氏「東北方言の音韻」(『方言研究の問題点』平山輝男博士選層記念会編、明治書院、一九七〇年八月)34頁「表10 ウ段音」によると、酒田市宮之浦では、「雪・百合・弓・指・醬油」―数珠・巡査・

